



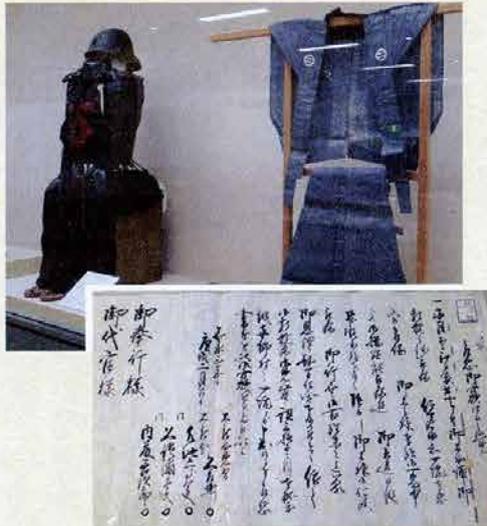
小野藩の善政、浮き彫りに 小野陣屋まつり協賛展に寄せて

新年度の小野市政がスタートした。当初予算のキーワードは「ハードからソフトへ」。言わば「思いやり行政」だ。くしくも4月5日まで好古館で開いている小野陣屋まつり協賛展「小野藩と町人・村人のくらし」は、領民に優しい「思いやり藩政」を浮き彫りにしている。

展示会場をのぞくと、^{かみしも}袴と^{かちょう}甲冑が目につく。袴は^山村の庄屋が藩に献金したお礼として藩主が贈った。庄屋の家紋を入れており、藩主の細やかな気遣いがうかがえる。甲冑も中番村の庄屋の忠勤に感謝した藩主が贈ったものだ。単に支配者と被支配者の関係でない、温かい交流があった。

◆年貢は安く、町人は無税!?◆

では、小野藩はどんな善政をしていたのか。好古館長・石野茂三さんは「実質年貢率が約20%で、近隣の幕府領や諸藩領に比べかなり低かった」と指摘する。展示してある「黒川村土免状」(1841年)などから分析した。江戸時代の年貢は、近年の研究で実質は「4公6民」「3



(上) 藩主から領民への拝領品の袴や甲冑。(下) 江戸藩邸火災の見舞い金の「寛」好古館蔵

公7民」ぐらいだったとされている。これに比べても小野藩領の年貢はさらに低かったわけだ。

また、小野藩はなんと町民からは税金を取っていなかったという。「ほんまかいな?」と思うが、展示され

ている「小野藩大積帳」(1746年)という藩の予算書には、歳入として年貢収入しか計上されていない。ふつう城下町などの町場では家の間口税(地代)や収益の税金(小物成りや運上金)が課せられた。陣屋町の店屋敷は間口が他の2軒分、3軒分ある家が多いが、これは「商工業者誘致策で税を取らなかったことによるのでは」と石野さんは考察している。

◆領民も度々御恩にお返し◆

さらに、小野藩はときどき領民に祝い金(お小遣い)を配ったり、飢饉のときには援助米を配ったりした。1810年の「申渡覚」によると、6代藩主末昭が父の百日法要が済んだことを感謝して、領内全戸に銭(銀)1匁ずつ配った。別の文書には「領民御愛憐の思召し」としている。

1837年の文書では、前年の凶作で食にも事欠く人が出てきたので、大部、垂井両郷に「御救米」として藩の蔵米百石を配給したことがわかる。

こうした藩の善政に対し、藩が困った時は領民が進んで援助の手を差し伸べている。1850年の文書は、同年2月、江戸の藩邸が火事にあつたのを受け、大庄屋たちが藩主父子はじめ家中の人たちが無事だったことを喜んだうえ、「お見舞い」として銀30貫目(金500両)を献納したいと申し出た。また、4代藩主末栄の『家政録』は、「藩財政が難渋したとき、度々御用金を課したが、領民たちは精を出して応じてくれた」と記している。

ではなぜ小野藩はこれほど善政を施したのだろうか。「1万石の小藩で、陣屋のごく周辺に所領があり、領民たちの暮らしがよく見えていたからではないか」と石野さんは推察している。

江戸時代も現代も「住むなら! やっぱりおの」だったのだろうか。



佐野允彦(さの・まさひこ)
元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員(広報アドバイザー)。小欄は50回を超してほとんどネタがつき、困っていますが、「追録」というかたちでしばらく続けます。



信仰とレジャーの加東八十八ヶ所

好古館・春の企画展に寄せて

先日、妻の親の墓参りで徳島へ行った。四国八十八ヶ所・13番札所の大日寺の近くで、お遍路さんを何人も見かけた。四国路ではお遍路さんの鈴の音で春を感じる。小野も春。好古館では企画展「加東四国八十八ヶ所巡礼の旅」が開催中。私もささやかな巡礼の旅に出かけよう。

◆加東巡礼は大正7年創始◆

今年が高野山開創1200年の記念の年。その開基の弘法大師空海ゆかりの四国の寺88か所を巡るのが四国遍路（巡礼）だ。ここ20年ほど大変なブームが続いている。

戦前、加東郡内（いまの小野市、加東市）で地域巡礼のブームがあった。それが企画展で紹介している加東四国八十八ヶ所だ。

大正7（1918）年に郡内の仏教関係者が四国巡礼になぞらえて、郡内88の寺院・仏堂を指定し、毎年旧暦の3月15日から12日間を参詣縁日と定め、巡拝を勧めたのが始まりという。

『加東郡誌』（大正12年刊）には「仏道信仰に厚からしめん」とある。もちろん信仰の普及という純粋な宗



80番札所の観音堂＝住吉町で

教活動だろうが、寺院側にすればお布施・さい銭の期待、信者からすれば信仰を表にしたレジャーの面があっただろうことは想像に難くない。もともと北播磨には巡礼の風土があった。『小野市史・第一巻』は、室町時代から江戸初期にかけての浄土寺への参詣ブームを掲載。巡礼

者の落書きには遠くは奥州平泉、九州・筑前などの地名があるそうだ。江戸時代、庶民は勝手に居住地を離れることは禁じられていた。だが、幕末の1864年、舟木村の倅5人が西国巡拝へ、倅15人が大峰山参拝に無断で出かけ、大庄屋に「抜参託状」を出している。

◆見どころ、味どころ各所に◆
私は「抜け参り」でなく、ちゃんと市役所に届け出て、4月上旬のある日、このコラム執筆のためミニ巡礼の旅に出た。まずは住吉町の観音堂（80番）。道から少し外れているので、なかなか見つけられなかった。なぜ、ここを選んだかと言うと、企画展に大正7戦前の関係書類が展示されているからだ。11冊残る参詣人名簿では、大正11年に13日間で2812人が記されている。大正14年の帳面では接待のための食材や線香などで約30円支出していることがわかる。いずれも初公開の資料だが、「おもてなし」の源流を見る思い。

『加東郡誌』に「巡拝者が路に満ち、読経の声は山野に響けり」とあるのは、大げさな表現ではなかったようだ。だが、いまはよそからの参拝者

はあまり見られない。堂にはタコの絵が描かれた絵馬が数点掛けられている。イボ（吸い出し）にご利益があるのだろうか。

次いで訪ねたのは、万勝寺町の萬勝寺（65番）。今まで一度も来たことがないからだ。法道仙人の開基とも伝えられる古刹だ（寺伝では行基の開基）。石段は桜花散り敷く花道だ。阿弥陀堂には県指定文化財の阿弥陀如来坐像が安置されている。門前には「日本中央標準時子午線」の石柱が立つ。これも知らなかった。寺の前のそば屋で遅い昼食に皿そばを食べた。うまい。これも知らなかった。小野は奥が深い。

市民の皆さま、休日に88か所のうちの2、3か所でも回られ、地域の歴史や文化、ついでに味にも触れてはいかが。なお、企画展は5月17日まで。お早めにどうぞ。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。20代のころ、徳島に4年在勤、この間、四国霊場のうち6~7ヶ寺は回った。ただし取材で。もう少し信仰心を持てばよかった。



室町・戦国期豊地城の姿を探る

ひょうご遺跡展の資料をもとに

「えっ、こんなすごいものが出ていたのか」。旧聞で恐縮だが、3月末まで県立考古博物館で開かれていた「ひょうごの遺跡」展で、中谷町にある豊地城の出土品を見て、思わず声をあげた。本欄でこれまで2〜3度、豊地城跡のことを紹介しながら、私の知らない資料が展示されていたからだ。今月はおさらいも兼ねて、豊地城を再訪しよう。

まず簡単に復習を。豊地城は室町・戦国時代（15〜16世紀）、北播磨の拠点の城郭で、ほぼ一貫して播磨守護・赤松氏の有力家臣だった依藤氏が城主だった。16世紀後半になってライバルの三木城・別所氏に滅ぼされ、豊地城には別所長治の叔父、重棟が入った。三木落城（1580年1月）後、播磨攻略を終えた羽柴秀吉による播磨8城の城郭破却令で廃城となった。

◆文明6年の護摩札◆

遺跡展に出品された資料は、主として同博物館が2009年度に実施した豊地城跡での発掘調査の成果だ。そのうち、うかつにも知らず、また



遺跡展に出品された豊地城跡の出土品。左上が護摩札の写真パネル＝県立考古博物館で

最も注目したのは「文明六（1474）年九月廿九日」という年号が墨書された木簡だ（展示は写真パネルのみ）。同城跡では年号が記された初めての出土品で、貴重な資料だ。

発掘当初は湿気た土に埋もれてい

て十分観察できず、水洗いし、X線を照射してはじめて文字を読み取れたそうだ。年号のほかに「不動護摩八千枚」などの文字が読めるという。だとすると、不動明王をまつる護摩供養のさいの護摩札だったのだろう。

以下は私の勝手な想像だ。文明年間ごろの北播磨は、応仁・文明の乱の影響で、赤松氏の勢力と但馬・丹波の山名氏の勢力が入り乱れていた時期だ。だが、文明5年3月に西軍の総大将、山名宗全が死没しており、依藤氏（当主は恐らく豊後守則忠）が山名勢の追討勝利を祈願して不動護摩供を催したのではないだろうか。護摩札には釘穴が残っているが、豊地城内には仏堂が仏間があり、その壁か柱に打ちつけられていたものだろうか。

◆瓦ぶぎの櫓持つ大城郭◆

発掘ではコンテナ箱で100個分ほどの瓦が出土した。戦国期の瓦は主に「城畑」と呼ばれる場所周辺で出土しており、織豊期の主郭をこのあたりと想定している。瓦をふいた高層の櫓があったと推察される。

ただ、これは依藤時代のもものでは

なく、天正年間（16世紀後半）、別所重棟時代のものという。かつて小野市教委の調査で石垣が検出されており、石垣の基壇の上に建つ瓦ぶぎの櫓は天主のかわりだったのだろう。発掘を担当した県立考古博物館の上雅弘さんは、三木の瓦工人橋氏がふいたとみている。

また、江戸時代の庄屋敷跡とされる場所（「古屋敷」）は1辺70メートルの方形居館で、ここは依藤時代の主郭と見られる。

このように豊地城は新旧2つの主要な郭を持ち、周囲に大規模な堀・土塁をめぐらした東西約500メートルの範囲に広がる大規模な拠点城郭だったことがわかってきたのだ。

ただ、山上さんによると、同時期に全域が城として活用されていたわけではなさそうという。豊地城にはまだまだ目が離せない。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。ネタに困った時は、豊地城頼みということではない。大坂の陣(豊臣家滅亡)から400年の今年、秀吉ゆかりの城跡を訪ねるのも興味があろう。



小野の道標を訪ねて

信仰ともてなしの心の発露

小野市内を回っていると、あちこちで古い道標を見かける。わざわざ立ち止まってきちんと見たことはまれだった。広報5月号の本欄で「加東四国八十八ヶ所」を紹介した際、好古館での企画展で加東八十八ヶ所を示す道標の写真を十数枚見て、興味深く感じた。今月は企画展に導かれ、市内の道標を巡る旅に出かけよう。

◆最古の道標は享保13年◆

言うまでもなく、道標は行き先の方角や距離を示した道しるべ。辻などの道路標識でなく、社寺への参詣ルートを示し、かつ巡礼成就のお礼や親族の供養を兼ねた、信仰にかかわるものが多い。幸い小野市には「小野の歴史を知る会」が平成19年と24年に実施した道標の調査報告書（同25年発行）という貴重な文献がある。この本を道しるべに本稿を書き進めよう。

同書によると、市内には117基が現存しているという。もともとはこれに倍する道標があっただろう。市内で一番古いものは、下来住町中村に残る道標だ。正面上部に仏像



（右）左 やしろ きよ水へ六り など彫った道標Ⅱ東本町（左）加東四国道路の道標Ⅱ浄谷町、上部に指差しマークがある

が、左面に「享保十三」（1728）年と刻まれている。8代将軍、徳川吉宗のころだ。

市民の皆さんに最も親しまれているのは、小野商店街の真ん中の四つ角に立つ道標だろう。ここは旧小野

藩陣屋町の中心に当たる場所だ。文化4（1807）年のもので、「左 やしろ きよ水（清水寺）へ六り（里）」、「右 じょうどじ（浄土寺）三十丁 大深山へ二り（里）半」などと刻まれている。「西国同行」「念仏講中」とあるのは、道標を造立した信仰仲間だろう。目的地への距離まで示しているのは珍しいそうだ。

「歴史を知る会」の解説が面白いので紹介する。小野地区の道標の分布状況を見ると、浄土寺を中心に放射状に広がっているという。これは浄土寺が古くから信仰の拠点だったことを示しているのだそうだ。

◆指差しマークが特徴◆

道標造立のピークは、江戸時代後期と見られる。領民をしばりつける規制がゆるみ、また庶民も旅に行ける経済的余裕ができたからだろう。次のピークは明治、大正時代で、北播磨では5月号で紹介した加東四国八十八ヶ所の制定Ⅱ大正7（1918）年Ⅱが契機になった。

加東巡礼のものは、たいいてい「指差しマーク」がついているのが特徴という。浄谷町のはなみずき街道の

休憩所にある道標もその一つ。上部に指差しマークと「加東四国」が刻まれ、中段には「へんろみち 次の札所 第六十二番」と記している。

道標には仏像を彫ったものが少なくなく、信仰の対象である石仏も兼ねていたのだろう。巡礼や旅人の道中安全を祈った心も込められたのが道標なのだろう。

近年は様々な地図が豊富に入手できるし、音声と地図の両方で行き先を教えてくれる車のカーナビまである。古い道標は無用の長物になった。道路工事やほ場整備で片付けられたり、溝に埋められたり、盗まれて料亭の庭に飾られたり；受難が続く。しかし、地域の歴史や信仰、交通などを知る貴重な文化財だ。他の石造物とともに大切に守り続けていきたいものだ。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。学生時代、日本史の実習で石仏の拓本取りをした経験がある。以来、石造品にも関心を持ち続けていた。意外と意志(石)堅固でしょ!



青野ヶ原の旧陸軍施設

戦後70年の節目に思いはせて

今年には戦後70年の節目の年だ。さまざまな行事が催され、また戦争を巡る議論も展開されるだろう。本コラムは広報紙という性格上、政治的な言説には踏み込まず、史実と史跡を訪ねるとい立場で「青野ヶ原」台地にあった旧陸軍の演習場と戦車連隊のことを紹介したい。

演習場と戦車隊については昨年10月号の本欄で触れた。ただ、一度きりで書ききれるテーマではない。好古館では企画展「太平洋戦争と戦時のくらし」も開催中だ（9月27日まで）。

◆「大阪ろまん」の作詞者も◆

まず前回、書きもらした人のことから。戦車隊に若き日の司馬遼太郎が入営し、三島由紀夫が入隊しそびれたことは書いた。あと一人、作家の卵がいた。大阪出身の石濱恒夫だ。フランク永井の「大阪ろまん」などのヒット曲の作詞家でもある。司馬自身、「青野原の戦車隊に」入営したときからの戦友で、満州の四平戦車学校では、おなじ戦車にのっていた」と書いた（「司馬遼太郎が考え



（上）旧陸軍戦車隊の記念碑（兵庫青野原病院で）
（下）旧陸軍の戦車の模型も並び展示（陸上自衛隊青野原駐屯地で）



たこと」新潮文庫）。市民には意外と知られていない事実だ。

司馬や石濱は満州（中国東北部）に移るが、先輩格の戦車第六連隊は1941年12月以降、マレー作戦に従事。満州移駐を経て44年にはフィ

リピン防衛戦に投入され、ルソン島の戦闘でほぼ全滅したという。

演習場では、新兵器の飛行機の演習のほか、姫路師団による毒ガス防護演習も行われた（『小野市史』第3巻）。

1937年の日中戦争開始以降、戦争激化とともに小野市域からの兵士動員も急増していく。『小野市史』は同年8月の第1週だけで市域から送りだされた応召兵の数は300人前後と推定している。当然のことながら市域出身兵士の戦死数も増え、市史では39年だけで計27回の「英霊」に対する公葬（町村葬）が行われたとの表を載せている。

◆子どもたちも巻き込まれ◆

子どもたちも戦争に巻き込まれていく。旧制小野中学校の軍事教練は演習場で行われた。小野中の生徒は陸軍三木飛行場の建設工事にも動員された。河合尋常高等小学校は、防空演習訓練、部隊出発の見送り、騎兵十連隊の演習見学、戦車隊の見学などを行っている。軍隊が各学

校の校舎を宿舍とする事態も相次いだ。食糧増産のための農作業や軍需工場への学徒動員は言うまでもないだろう。これらの関係写真も企画展に展示されている。

1945年8月15日、終戦。戦後、演習場・戦車隊の跡地は、旧河合中学校、兵庫青野原病院、陸上自衛隊青野原駐屯地などになった。河合中の校舎は戦車隊の建物を改造したもので、「頑丈だが、採光が悪く薄暗く、冬は寒さが厳しく、夏は蒸風呂のよう」だったという。

昨年10月の本欄で、「戦前の演習場や戦車隊跡の記念碑がない」と書いた。今回、自衛隊駐屯地の展示室を取材し、展示資料で戦車隊の記念碑などが残っているのを知った。遅まきながら訂正します。展示室には豊富な資料が紹介されている。来年は駐屯地創設40周年だそうだ。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。本文末尾に訂正文を入れた。戦後生まれの自分の不勉強を棚に上げるようだが、地元に残る「戦争遺跡」に関心を持つべきだと反省しています。



戦後70年、金鐘城跡を再訪

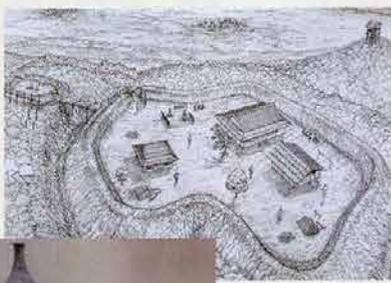
20年ぶりの報告書刊行を喜ぶ

戦後70年の節目ということで8月号の本コラムは、青野原台地の旧陸軍演習場を紹介した。だが、この台地に目を付けたのは、旧陸軍だけではなく、はるか2千年昔の弥生人、そして600年ほど前の武将もだ。その痕跡を残す「金鐘城遺跡（昭和町）」の発掘調査報告書が今春発行され、いま広渡廃寺跡歴史公園ガイダンスホールで企画展が開かれている。この機に金鐘城跡を再訪しよう。

再訪と書いたのは、4年前に一度紹介しているからだ（平成23年9月号）。だが歴史的に見てこんな面白い遺跡を一度限りの紹介で終わらせるのはもったいない。

◆弥生の情報伝達施設か◆

まず時代順で弥生時代から。この時代Ⅱ弥生中期（1世紀ごろ）は、もちろん城跡ではない。平地との比高差約60cmの台地上に営まれた、「高地性集落」と呼ばれる遺跡だ。高地性集落と言うと、「倭国大乱」と関係づけられ、戦争に備えた防衛機能のイメージが強い。私も前回は加古川流域を見下ろす要害の地にあり、弓矢に使う石鏃（せきぞく）などが出土し



金鐘城の復元イラスト（写真上）と茶臼、硯などの道具類

たことから、「おそらく平地の大寺遺跡の集落を守るための見張り所だったのだろう」と書いた。石鏃は企画展に展示されている。

だが、今回報告書をまとめた好古館の西田猛副館長は、「軍事的緊張関係というよりも、加古川という交

通路を媒介とする情報伝達を目的としたものではないか」と考えたいそうだ。つまり、加古川という交通路の管理と、伝わってくる情報伝達のための施設であったと見たいという。昔も今も速やかな情報キャッチは、軍事でも政治でも最重要で、「情報戦」などという言葉もある。だとすると、当遺跡は情報戦の最前線だったと言えようか。

◆戦国の山城でも風流な暮らし◆

弥生の高地性集落から約1300年後の室町時代、金鐘城が築かれる。高地性集落のあったところに中世の山城が築かれる例は全国的に少なくない。戦乱の時代には城は山に上がるものようだ。

室町期の城主は、古記録では赤松氏の有力家臣、中村氏とされている。発掘調査の成果によれば、城は主郭を中心に東西に両手を伸ばしたように左側の「西の郭」、右側の櫓台で構成されていた。主郭の周囲は幅約9m、現高約1・2mの土塁が巡らされ、堀切（空堀）も巡らせ、結構な要害堅固の城であったことがわかる。尾根先端部の櫓台には櫓が設けら

れ、弥生時代と同じように加古川や街道を見張っていたのだろう。

主郭には、4棟の建物跡が残り、16世紀中ごろから後半のものと見ている。東側の2棟は礎石建ちの大きな建物で、城主の屋敷とする。瓦をふいた建物もあった。ただ、この時期の城主は、天文年間（1532～54）に中村氏を滅ぼした三木の別所氏と考えられる。西田副館長は別所氏が中村氏の城を大規模に改修したと推測している。

出土品で面白いのは、魚を捕る時に使う網のおもりの土錘（どづゑ）も出土していること。なぜ山城に漁労具が？ また、文具類の硯など、中国からの輸入品の白磁や青磁の高級焼き物、茶臼などもあり、戦時下（？）でも風流な時間もあったようだ。企画展（10月25日まで）ではこれらの資料も見ものだ。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。金鐘城跡は弥生、中世、近代と3代にわたる防衛的遺跡が残る。全国各地の遺跡を見てきたが、こんな例は珍しい。それがあまり知られていないのが残念だ。



「小野藩の幕末・維新」展

藩あげて御所と大阪湾岸を警備

NHK大河ドラマ「花燃ゆ」は幕末の長州が主な舞台。ペリー来航（1853年）以降、欧米諸国の「黒船」の来航が相次ぎ、薩英戦争（1863年）、下関戦争（1863・64年）が起き、内陸の1万石の小藩、小野藩も攘夷か開国かの時代の激動にのまれていく。今日は幕末の小野藩を訪ねる。

小野藩が大阪湾岸の警備に駆り出される契機は、1854年、大阪湾・天保山沖へのロシア艦船ディアナ号の来航だ。黒川村大庄屋へ大阪の宅配便業者（大坂常飛脚）・大坂屋定次郎が、異国船が来航し、諸藩の軍勢が駆け付けける緊迫した情勢を急報している。このとき小野藩にも出動命令が下っている。

さらに、下関戦争で長州藩が外国船へ砲撃した直後の63年5月末、10代藩主・末彦が大坂警備の幕命を受ける。だが病気のため隠居し、養子の末徳が14歳で藩主となり、大阪湾岸警備を引き継ぐ。

◆8・18の政変で藩主自ら御所警備◆
同年7月、末徳は將軍家茂に拝謁、



小野藩が湾岸警備で詰めた「大坂舟手会所跡」の石碑。
右肩は8・18の政変を記した「公私日記」（好古館で）

お国入りを許され、8月3日江戸を発ち、16日京到着。17日の御所参内を願い出たが、夜になり「留守中」につき不都合との返事が来た。いわゆる「8月18日の政変」が起きたのである。薩摩・会津藩を中心とする公武合体派が、長州藩など尊王攘

夷派の御所からの締め出しをねらったクーデターだ。

以下、しばらく「小野旧藩誌補遺稿」（藤本欣司著）などをもとに書き進める。

18日早朝、在京の主な諸藩に御所警備の命が下るが、1万石の小藩、一柳家は蚊帳の外。少年藩主、末徳公は「口惜しく候」と話された。夜になり、「小藩の向きも総人数で」御所の九門警備に出動するよう召集令が届いた。殿様は勇躍、火事装束姿になり、供の藩士にゲベル銃を持たせ、他の藩士は旅袋姿のまま槍を手に御所へ出陣した。翌19日朝、昇殿し、鳥取藩主の組下に加わるよう命じられ、中立売御門の警備に当たったようだ。

御所の警備は26日まで続き、末徳は27日に参内し、御所警備の功で孝明天皇から扇と御衣を賜った。末徳はこのことを生涯誇りに思っていたという。

◆藩主は湾岸警備も「御検分」◆

小野藩の大阪湾岸警備の持ち場は、「安治川舟手」と決まっていた。これは幕府の「大坂舟手会所」とい

う機関（役所）で、大阪湾から木津川、淀川への船の出入りを監視、管理する重要な場所だった。小野藩はここを拠点に活動したようだ。

現在は大阪市西区川口1丁目、交差点の角の緑地に会所跡の小さな石碑が立つ。周りはマンシオンやビルが立ち、当時の面影はない。

御所警備を終えた末徳は8月末、大坂に出向き、10日間ほど滞在、舟手会所など警備の状況を「御検分」した。安治川での活動は1年間だけで、その後、市中警備や尻無川一帯の警備など警備対象は度々変更された。慶応元（1865）年12月にその任務を終えた。

12月27日まで好古館ではコーナー展「小野藩が体験した二つの事件」で、8月18日の政変と北越戊辰戦争を紹介している。市民の皆さん、ぜひご見学を。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。司馬遼太郎は時代小説「俄一浪華遊快伝」に、小野藩は湾岸・市中警備を大坂の俠客に丸投げしたと書いた。私は、史料の根拠が薄いと疑問を投げかけたことがある。



あさの娘婿殿は小野藩主の若様

NHK「あさが来た」に寄せて

NHK朝の連続ドラマの新作「あさが来た」が9月末、始まった。主人公・あさのモデルは大阪の豪商「加島屋」の女主人で、のちに大同生命を創業し、さらに我が国初の女子大学「日本女子大学校」の創立にも関わった広岡浅子（1849～1919年）だ。実はその娘婿は小野藩ゆかりの人物なのだ。今月はこの人を訪ねよう。

◆見込まれた元藩主の次男坊◆

浅子の生涯はドラマを見てのお楽しみで省くが、明治時代、関西で名高い女性実業家だった。ちなみに広岡家の先祖は中世播磨の名門、赤松氏と伝えている。浅子は1888年に加島銀行を設立、1902年には大同生命の創業に参画した。娘（亀子）一人だけで、事業の後継者含みで婿を迎えたのが一柳恵三（1869～1953年）だ。



広岡恵三大同生命保険提督

恵三は小野藩最後の藩主、一柳末徳の次男。末徳が明治維新後、福沢諭吉の慶応義塾に学んだこともあり、恵三は慶応幼稚舎を経て学習院に進



大同生命大阪本社での展示と小野藩史蹟碑（西本町）

み、亀子と婚約当初は東京帝国大学法科在学中だった。

よほど浅子から見込まれたようだ。浅子がどこで恵三の存在を知り、どこを買ったのかはよくわからない。ただ、浅子自身、福沢諭吉の著作のファンだったといい、福沢つながりのネットワークで恵三の存在を知ったのかもしれない。

恵三は大学卒業後、しばらく三井銀行に勤めたが、義父・信五郎没後、家督を継ぎ、加島銀行入りし、1909年に大同生命の第2代社長に就く。以来1942年まで33年間も社長として、事業の躍進に貢献した。ただの子爵家の若様ではなく、経営の手腕もあったようだ。当時のある新聞記事も「一見名門の若殿を偲ばしむると言えども、決して柔弱なるに非ず眉宇に溢るる精悍の気…」などと好意的に批評している。

また、大同生命大阪本社（大阪市西区江戸堀1丁目）にある展示パネルでも「社長就任直後から持ち前の指導力で諸改革に積極的に取り組んだ。販売網の整備など経営の近代化に向けた新しい布石を次々と打った」（要旨）と高く評価している。

◆満喜子・ヴォーリス結婚の端緒◆

一柳満喜子は恵三の妹で、アメリカ留学後、恵三の東京邸で姪たちの世話をしていた。そのとき（1918年）、東京邸の新築の依頼を受けた米国出身の建築家、W・M・ヴォーリスと出会う。二人の結婚に周囲はみな大反対だったが、浅子だけは二

人を応援したという。こののち、ヴォーリスは大同生命の旧肥後橋本社ビル（1925年）ほか多くの社屋を手掛ける。浅子と恵三がいなければ満喜子・ヴォーリス夫妻はこの世に生まれなかっただろう。

大阪本社のメモリアルホールでは、特別展示「加島屋と広岡浅子」を開催中。ヴォーリス・満喜子夫妻のコーナーもある。会場のホールそのものがヴォーリス設計の旧本社ビルの内部を一部取り込んでいます。

恵三は東京の生まれ育ちで、残念ながら小野との縁は薄い。ただ、好古館前の磐代神社境内に建つ「小野藩史蹟碑」（昭和12年）の題字は、恵三の筆になる。碑文の冒頭に「第十一代藩主一柳末徳次男廣岡恵三隸額」と刻されている。

※記事中の人物の氏名は歴史上の人物ということで、すべて敬称を略しました。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者で小野市学術政策員。大同生命大阪本社のそばを流れる土佐堀川をはさむ向かい側に私の勤めた朝日新聞大阪本社ビルがある。朝ドラのプロデューサー佐野元彦さんは、残念ながら私とは無縁です。



豪商・近藤家の「企業城下町」

川湊で栄えた江戸後期の市場地区

1184年、源義経の騎馬軍団が市場地区を怒涛のよう駆け抜けていったから約650年後の1833(天保4)年、百姓らの大群衆が加古川筋で一揆を起こして駆け抜けていった。好古館の特別展「江戸時代の産業経済の発達」(12月20日まで)にあわせ、その主要舞台、市場地区を訪ねる。

◆加古川舟運で繁栄する近藤一族◆

一揆勢が市場地区(太郎太夫村)を襲ったのは、そこに豪商・豪農の屋敷が建ち並んでいたからだ。江戸時代に入り加古川舟運が盛んになるが、加古川と山田川の合流点に近く、加古川が大きく湾曲し、川幅が広く、水深も深い市場地区は流域一、二の川湊に発展していた。

その川湊を根拠にする最大勢力が近藤家だった。遅くとも19世紀前半には、近藤家は運送・倉庫業の舟持、問屋を中核に一門で干鯛屋、酒屋、呉服屋、醬油屋など幅広い事業を展開していた。さらにその利益を基に土地を集積し、大地主に成長していった。

特別展注目の資料の一つ、「近藤



(上)近藤亀蔵家屋敷跡の石垣(市場町で) (下)近藤家を描いた絵(部分) 好古館で



家家宅図」には、蔵を持つ屋敷の前に船着き場があり、人足が蔵から米俵を舟に積み込むにぎやかな絵が描かれている。1836年制作のものだが、屋敷構えが小さいことや船着き場が天然の岩場であることなど創業期の近藤亀蔵宅の様子を描いたものである。

「小野市史第2巻」によると、近藤家は5代目亀蔵の時代には、加古川舟運だけでなく、海上の廻船業にまで事業を広げる。千石船以上の大型船数隻を持ち、松前(北海道)航路に進出して、さらに財をなした。

豊かな財力を元手に金融業も始め、「大名貸」まで請け負う大豪商に成長する。亀蔵家が貸し付けた大名は、小野藩一柳家はもちろんのと姫路藩酒井家、館林藩松平家、土佐藩山内家など20家に及んだという。1819年には幕府に対し近藤一族で6千両もの御用金を拠出して

いる。こうした富裕ぶりが加古川筋大一揆のとき、最大の標的になったと見られる。

◆打刃物業など多彩な産業が発展◆

私的なことながら今回の特別展で目を引いたのは近藤家以外では、市場地区が打刃物業の一大産地だったという歴史だ。「播州鎌」がそばんに並ぶ地場産業とは知っていたが、剃刀鍛冶を中心に釘、鉄などの打刃物業が「金物の町」とされる美囊郡三木町(現三木市)をしのぐほどに発展したという。

また、市場地区の村々では菜種、綿花、大豆、葉タバコ、茶など多種類の商品作物を栽培、出荷していた。菜種の絞油業、綿花の機械業などの農産加工業も発達したという。

これら内陸部の農産品・加工品は至便な陸路を経て太郎太夫村(市場地区)に集積され、川湊から高砂湊を介し、明石、兵庫、大阪などに出荷されていた。好古館の石野茂三館長によると、太郎太夫村は加古川筋随一の川湊を有し、さらに流通システムをも持っていたことから、加古川筋有数の「流通経済都市」に発展したという。

いま繁栄した江戸時代の市場地区をしのぶものはあまり残っていない。古い道筋に、蔵や門構えを持つ大きな屋敷が点在するぐらいだ。特別展に足を運び、市場地区の歴史を再発見していただきたい。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者で2010年から小野市学術政策員。NHKの朝ドラ「あさが来た」が大好きだ。モデルの大阪の豪商、加島屋と市場の近藤家はどちらがより富裕だったのだろうか。勉強不足で、わからないことは多い。

【訂正】11月号で広岡(一柳)恵三の生年を1869年としたのは1876年の誤りでした。



小野にも猿田彦や三猿がいた？

申年にちなむ話あれこれ

新年おめでとうございます。毎年1月号は干支にちなむ小野の歴史・民俗を紹介してきました。ところが、昨年(未(羊・山羊))にかかわる話は皆無で中断。今年の申(猿)もいいネタが見つからず、この題から去るべきかと思案していた。そこへいつも頼りにしている好古館の粕谷修一学芸員からいくつかネタを教えてくださいました。

◆猿田彦の祭と神社◆

猿にちなむ話で一番古いのは、神話の猿田彦(サルタヒコ)だろう。天孫降臨の際、分岐路にいて道案内をした。鼻が長く、顔(目)が赤い風貌からのちの天狗と混同されていく。道案内の神という役割、神社の祭礼で神輿渡御の先導役にもなる。

久保木町の住吉神社の祭礼では天狗の面をかぶった猿田彦役の人が、神輿、獅子舞を先導して歩く。小田上町の垣田神社の秋祭では、神輿の行列の先頭に立つ人が御幣(ごひ)をつけた棒の先に天狗の面を掲げて先導する。享和3(1803)年の「遷幸行列次第」に「道祖神」と記されたのが相当する。猿田彦が道案内の神なので、道端で厄災を防ぐ道祖神と



(左)住吉神社境内に祀られている猿田彦神社=垂井町
(右)下来住町・常光寺のお堂に安置されている青面金剛像(中央)と三猿像(手前)=好古館提供

混交されるようになったのだ。

ずばり猿田彦神社が垂井町の住吉神社にある。神社と言っても本殿の脇にある小さな祠だ。いつごろどうして祀られるようになったのか由来はよくわからない。「市場村誌」

に載る古い境内図によると、そこはもともと「庚申堂」(後述)があった場所、その縁で祀られるようになったのかもしれない。

◆日吉山王と秀吉と庚申信仰◆

加東市厚利にある山王神社にかかわる伝承として、山王神社の使いである猿が通ったので、池田町の一部と曾根町が氏子になったと言いつた。各地の山王社・日吉社は近江・坂本(滋賀県大津市)の名社、日吉大社が本社で、比叡山の神様。その神使が猿だった。日吉町に日吉神社があるが、由来は不明。寛政11年と刻した石灯籠があるから、江戸時代には祀られていたのだろう。

日吉とくれば日吉丸。そう、「太閤渡し」などで小野とも縁の深い豊臣秀吉の幼名だ。秀吉はのちに天文5年の申年の生まれで、母が日輪(太陽)受胎して誕生したとの伝説を創作した。日吉山王権現と結びつけ、自らを神格化するねらいだった。顔や動作が猿に似ていたのは本当のようだ。

江戸時代になると、全国的に庚申

信仰が盛んになる。これは庚申の日の夜に人間の体内に住む虫が天帝に悪事を告げるので、この夜は眠らずおまつりするというもの。各地に庚申塔、庚申堂が建てられ、青面金剛と「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿像が祀られた。

下来住町にある常光寺の観音堂には、その青面金剛と三猿の像が祀られている。ふだんは扉に鍵がかけてお供えをしておまつりするそう。

人気絶好調のNHKの朝ドラ「あさが来た」の主人公、広岡浅子の娘婿、恵三の妹が一柳満喜子なのは皆さんご存じの通り。小野藩最後の殿様の姫として明治17(1884)年の申年に生まれた。浅子の応援で米出国身の建築家ヴォーリズと結婚するが、さて彼女、彼らは今年、ドラマに登場するのだろうか。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年から小野市学術政策員。子どものころ、一時期「サル」というあだ名をつけられた。その縁か大学の卒論のテーマは豊臣秀吉。しかし、秀吉のように天下は取れなかった。



若き松尾臣善、五代友厚とかがわる NHK朝ドラ「あさが来た」にちなんで

終盤を迎えたNHK朝ドラ「あさが来た」は、なお高視聴率が続く。モデルの加島屋の女主人、広岡浅子とともに人気なのが、ディーン・フジオカ演じる五代友厚（1836〜85年）。元薩摩藩士で、維新後の沈滞した大阪経済再建の立役者だ。この五代と小野（旧阿形村）出身で、のち日本銀行の第6代総裁になる松尾臣善（1843〜1916年）に関係があるのでは、とひらめいた。今日は散歩でなく、その関係を探る旅に出かける。

◆加島屋とも交渉があったか？◆

松尾については3年前の2月号で紹介している。そのときは小野とあまり関係がないということで、四国・伊予の宇和島藩の名君、伊達宗城（1818〜92年）に見い出され、藩士に登用されたこと以外、青年時代のことはたいして触れなかった。さて、その宇和島藩だが、実は加島屋から借金していたのだ。江戸後期の加島屋は「両替商兼諸国取引米問屋」を営む大阪有数の豪商で、諸大名に金を貸す「大名貸し」もしていた。融資先は大大名の長州藩から新撰組にまで及んだ。

松尾は文久元（1861）年に藩



写真右は、「神戸事件」の碑が立つ三宮神社（神戸市中央区）。左は、小松帯刀の書状で、五代らとともに松尾の名がある（神戸市立中央図書館所蔵）。

士に登用され、「産物の事を掌理」した（松尾著『還暦記念録』明治37年）。宇和島の物産である紙、木蠟、鯛などを買い上げ、大阪に輸送して販売するなど主に経済・財政面を担

当している。とすると、加島屋と交渉を持っていた可能性は十分考えられる。

ドラマでは昨年10月、あさが「宇奈山藩」の大坂蔵屋敷に借金返済を求めに行き、足軽部屋で一夜を過ごす場面があったが、あのモデルは宇和島藩だという。びっくりぽんだ。

◆五代とともに明治政府の外交官に◆

松尾の略伝を調べていて、松尾が後藤象二郎（土佐藩重臣）を補佐して「神戸事件」解決にあたったことも知った。ならば五代とも関わったはずだと目星を付けた。神戸事件とは慶応4（1868）年1月11日、開港したばかりの神戸で備前藩兵の行列とフランス兵士が衝突、発砲。在神の諸外国軍隊が一時神戸の中心街を占拠する事態となった維新政府最初の外交上の大問題だ。

この事件と五代の伝記類を調べ始めた。松尾の主君、伊達宗城が新政府の代表の一人（外国事務総督）として外国側との交渉の指揮を執ったことがわかった。ならば松尾はそのもとで働いていた可能性はある？ さらに『五代友厚伝記資料』を読

み進めた。見つけた！薩摩藩家老だった小松帯刀が新政府の外交官名簿を英国領事に知らせた書簡だ。日付は慶応4年2月22日。それには

外国事務総（惣）裁として宇和島少将（宗城）ら5人の氏名、外国事務徴士参典として小松、五代才助（友厚）ら6人、外国事務御用掛として13人の名前があり、その最後に「松尾寅之助」とあった。寅之助は臣善の幼名だ。新政府の主要外務官僚の名簿に松尾の名もあったのだ。

これで松尾は伊達のもとで五代らとともに神戸事件の解決にあたったことが裏付けられた。五代はその後大阪府判事になり、大阪府政を担当、外国人向けに松島遊郭を開設する。松尾は明治2年に大阪府外務局会計長になり、「松島遊郭掛」を兼務するが、これも五代とともに働いた縁からだろう。びっくりぽんだ。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年から小野市学術政策員。松尾は高橋是清が主役のドラマ(NHK、2015年8月)にも日銀総裁として顔を出していた。地元であり頭影されていないのが残念だ。



少年藩主・幕末・維新を生き抜く 恵三・満喜子らの父、一柳末徳公

NHKの朝ドラ「あさが来た」はいよいよ最終盤。あさのモデル、広岡浅子の娘婿、恵三が小野藩最後の藩主、一柳末徳（1850～1922）の次男であり、ヴォーリズ夫人・満喜子の兄であることは本欄で度々紹介した。いまドラマにちなみ好古館では企画展「小野藩の幕末維新」が開かれている。

◆維新後上京し、慶応義塾に学ぶ◆

廃藩置県後の明治4（1871）年、末徳は上京し、間もなく慶応義塾に入学した。21歳ごろのときだ。これは兄で、三田藩主だった九鬼隆義の勧めであろう。隆義はかねて福沢諭吉と懇意で、維新後、事業経営の指導を受けたり、慶応に資金援助をしたりしていた。末徳は英学などを学んだという。

慶応での末徳の勉強ぶりが分かる史料はないかと探してみたら、慶応関連の文献に関係の記事を見つけた。それによると、塾生の成績を記した「学業勤惰表」があり、明治5年のそれでは1等から5等までのうち末徳は5等であった。これは何も一番下の成績ということではな



上は御所警護に対する幕府老中からの感謝の書状。下は帝国博物館の辞令と九鬼隆一館長の名を記した表書き。右は末徳の肖像写真（晩年）
いずれも好古館提供

く、その下に「等外」というランクがあり、5等は中級レベルというところのようだ。末徳の名誉のため誤解なきようにしっかり書いておく。

話は末徳の藩主就任時（1863

年）に遡る。もともと隆義も末徳も丹波綾部藩・九鬼家の出身。隆義はさきに三田藩・九鬼家に養子に入り、次いで末徳が小野藩・一柳家に養子に入った。これも兄の勧めと見られる。

末徳は当時14歳の少年藩主。上京した際、たまたま63年の「8月18日の政変」に遭遇し、自ら銃を携え、御所警護にあつたという話は昨年10月号の本欄で紹介した。

戊辰戦争では68年、京都守備の兵を率いて上京し、新政府に恭順。さらに、奥羽列藩同盟の諸藩が新政府に抵抗姿勢を示すと、藩兵を派遣。いわゆる北越戦争で、現在の新潟県内で敵の軍勢と戦闘した。

◆明治中期には帝国博物館勤め◆

末徳は明治12（1879）年、東京の芝区会議長に選出される。さらに、89年には帝国博物館に勤務した。恐らく兄隆義と縁の深い館長、九鬼隆一（三田藩→綾部藩出身）による縁故採用であろう。「一柳家史料」に九鬼館長から辞令を受けたという史料があった。

ただ、華族（子爵）の立場での名

誉職ではなかったかと思い、東京国立博物館に問い合わせしてみた。末徳にかかわる2件の史料を探して送っていた。

その史料の一つの「列品録」（明治22・23年）によると、美術工芸部の玉石類と甲角類の担当のところに末徳の名があった。単に名誉職ではなく、実務にも携わっていたようだ。明治23年からは貴族院議員を4期勤め、国政にも関与した。

幕末・維新期の活動は、どこまで末徳自身の才覚・手腕によるものかわからない。何しろ現代なら中学生から高校生の方が優秀な子どもたちに恵三、満喜子らの優秀な子どもたちを世に送り出した。このことは間違いなく末徳の実績だ。好古館での企画展は4月3日まで。この機会に、小野藩最後の殿様の実像に触れていただきたい。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年から小野市学術政策員。この連載は今月をもって終了いたします。長年のご愛読、ありがとうございました。4月からは新しい歴史コラムを再スタートしたいと考えています。